

- 2 花の妖精の曼荼羅
- 3 楽しんで学んだ英語
- 4 往年の名車50台集結!

市民記者がつくる

日日新聞

発行所：神奈川新聞横須賀支社 〒238-0004 横須賀市小川町21-9 TEL.046(822)2020 FAX.046(823)3845 ✉yokosuka@kanagawa-np.co.jp 第43号
神奈川新聞のご購読申し込みはフリーダイヤル ☎0120-446-709。1週間のお試し読みも受け付けています。購読料1ヵ月3,189円
平成27(2015)年10月4日発行

横須賀日日新聞

2015年10月4日

あなたが地域の主人公

「プロボノ」という言葉を初めて聞いたのは2010年、サポートセンターに赴任した年だ。その後気になりつつも、意識の下に眠っていた。

2013年夏、プロボノワーカーが集まる説明会兼飲み会があると聞いて夜の渋谷を訪ねた。驚きだった。大手IT企業の青年、女性起業家、若いクリエー

プロボノ

現役社会人の社会貢献

が仕事上のスキルを使ってボランティアを行うことだ。会を主催するNPO法人サービスグラントは、アメリカから日本にプロボノ文化を持ち込んだ草分けでもある。登録したプロボノワーカーから選抜でチー

たのです。彼らは自分の世界を広げたい」と語った。意味深い言葉だ。タイミングが良かった。神奈川県がプロボノ推進を計画していた。県のモデル事業で当センターのスタッフ沼崎真奈美さんを9月か

ター：20歳代から40歳代の才能にあふれるビジネスパーソンが真剣に社会貢献について語り合っていた。「プロボノ」はラテン語で「公共善のために」(Pro Bono Publico)の意味。社会人

をつくり、NPOを支援するシステムを作り上げた。若いビジネスパーソンが何を求めてプロボノを行うのか。私の質問に代表の嵯生馬さんは「若い社会人にとってソーシャルとビジネスの垣根が低くなってき

ら半年間、サービスグラントに派遣した。翌年には横須賀市の協働事業として進められた。試行錯誤しながらのスタートだ。

横須賀のプロボノワーカー、行政書士の岩堀達也さんは「さまざまな職種のプロとチームを組み、NPOのニーズを調査し、期間

たのだろう。課題は多い。横須賀には東京のように若い人材が多くない。そして地元経済の活力が社会人のプロボノ意識にも反映する。支援を受けるNPO側にもそれな



サポートセンターで行われた「One dayプロボノ」

内に一つの成果を挙げる仕組みは刺激的で緊張感があり、社会貢献と同時に自分のスキルアップになる」と語った。東京では、個人として参加する以外に、企業が若手社員にプロボノを経験させる例が多い。企業の社会貢献になるのと同時に研修制度としても効果が高いと考えられ

だが今まで社会貢献、ボランティアと最も縁遠いと思われる若い現役社会人が、自らの成長を兼ねて地域の活性化に役立って活躍できる横須賀なりのプロボノスタイルを作れるかが鍵となる。
(横須賀市立市民活動サポートセンター館長・高橋 亮)